

〔研究ノート〕

## 簡易気分調査票日本語版 (BMC-J) の 信頼性および妥当性の検討

田 中 健 吾

### 要旨

本研究は、感情の次元アプローチを提唱している Thomas & Diener (1990) の Brief, Momentary mood Checklists を邦訳し、実験法によるストレス研究で使用可能な尺度を作成し、尺度の信頼性・妥当性を検証したものである。高校生および大学生を対象とした調査の結果、本調査票の信頼性・妥当性がともに高いことが示された。

キーワード：感情反応、信頼性、妥当性

### 問題と目的

近年のストレス研究では、ストレッサーが身体へ影響を及ぼす過程に感情反応が介在すると考えられている (Cohen, Kessler, Gordon, 1995)。特に、Lazarus らによる心理学的ストレスモデル (Lazarus & Folkman, 1984; Lazarus, 1999) に準拠した研究においては、ストレッサーの体験が、ストレス関連疾患や不適応状態に至る前駆状態としてのストレス状態、すなわち心理的ストレス反応を、感情反応としてとらえ、測定・評価することが多い。それに伴い、感情反応を測定する質問票を作成し、尺度の構造に関する検討が多く行われている。

これまで、ストレス反応としての感情反応の測定については、調査法、実験法の2つの研究方法によって、それぞれ膨大な研究成果が得られている。これらの研究方法に共通して、質問票による測定が多く行われており、1) 複数の下位尺度から構成されていること、2) 否定的感情反応のみで構成されているものが多いこと、3) 尺度項目が多く、実験研究での使用が困難なものが多いこと、などの特徴がある。

ところで、感情反応の構造は、個別的感情アプローチと次元的感情アプローチに大別できる。「個々の反応はそれぞれ別個の独立したもので、互いに関連しているが異なった特徴や反応パターンを持つと仮定する」前者のアプローチが最初に試みられ、その後、「反応には基本となる少数の次元があり、それら次元の組み合わせによって個々の反応が規定されると考える」後者のアプローチが主流となり、現在は両者とともに一定の正当性を持つと考えられている (Stone, 1995)。

先述の1)の特徴は、多くの測定尺度が、各下位尺度が表す様々な感情反応が異なった

特徴や反応パターンを持つと仮定する個別的感情アプローチに沿ったものであることを示している。このような下位尺度を設けて検討を行うことは、臨床的に反応の差異や深化過程を扱う場合などでは有益な情報が得られる利点がある。例えば、島津・小杉(1998)は、職場におけるストレス反応について、「疲労」→「過敏」→「怒り」→「対人場面の緊張感」→「循環器系の不調感」→「抑うつ」と感情反応が深化する過程を明らかにしている。反面、このように各下位尺度の深化過程を問わず「心理的ストレス反応」として、各尺度を合計した得点を用いて報告されている研究論文が多いのが実状である。

しかし、個別的に反応の差異を詳細に論じる必要が無いのであれば、個別的感情アプローチに沿って、感情反応を測定・評価せず、次元的感情アプローチによって、肯定的感情・否定的感情のような抽象度の高い次元で感情反応をとらえることが、より効率的である場合もあろう。特に、一回性の実験研究によって急性ストレス反応の指標として感情反応を取り上げる場合などは、詳細な反応の差異を論じることには限界があるため、多くの下位尺度をもつ質問票を使用することは、研究にかかるコストを増加させることになる。

次元的感情アプローチに基づいた感情反応測定尺度には、PANAS (Watson, Clark, & Tellegen, 1988) や一般感情尺度 (小川・門地・菊谷・鈴木, 2000) などがあるが、本邦の心理ストレス研究においては、それほど活用されてはいない。このことは、2) に指摘したように、感情反応のもう一方の次元である肯定的感情反応を扱わないストレス研究が多いことにも反映されている。心理臨床上の問題には否定的感情反応が過度に生起するために起こるものもあれば、肯定的感情反応が生起しないために起こるものもある (Diener, Larsen, Levine, & Emmons, 1985)。このため、肯定的感情反応についてもストレス反応の指標として検討することが有用であると考えられる。

そこで本研究では、感情の次元アプローチを提唱している Thomas & Diener (1990) の Brief, Momentary Mood Checklists を邦訳し、実験法によるストレス研究で使用可能な尺度を作成し、尺度の信頼性・妥当性を検証することを目的とする。この尺度を選択した理由は、これまで報告されている次元アプローチによる感情反応測定尺度の中で、最も少ない9項目で構成され、3) に述べた尺度項目の多さという問題点も克服できることから、また、海外の研究報告では、その信頼性・妥当性が保証されているからである。

## 方 法

**調査対象：**首都圏の普通科高校に通う高校生男女238名、および首都圏4年制大学に通う大学生男女527名を対象に調査を実施し、それぞれ全員から回答を得た。このうち、高校生については、回答の一つでも欠損値のあった6名を除外した232名(男子119名、女子113名、平均年齢16.36歳、 $SD=1.01$ 、有効回答率97.48%)を、また大学生については、欠損値が一つ以上あった者に加え、年齢が30歳以上であった者も合わせた7名を除外した520名(男子195名、女子325名、平均年齢20.45歳、 $SD=1.28$ 、有効回答率98.67%)を分析対象者とした。

**調査票：**Thomas & Diener (1990) の Brief, Momentary Mood Checklists (BMCC) を邦訳

した。この尺度は、4種類のポジティブな語句 (happy, joyful, pleased, enjoyment/fun) と、5種類のネガティブな語句 (depressed/blue, unhappy, frustrated, angry/hostile, worried/anxious) を用いて、チェックリスト記入時の比較的短期間の情動 (一時的な気分) を7件法 (0 = 全く当てはまらない; 6 = 非常に当てはまる) で評定させるものである。

### 結果と考察

得られた有効回答について、最尤法およびプロマックス回転法による因子分析を行なった。固有値落差および抽出された因子の解釈可能性などを総合的に考慮した結果、2因子解が最も適切であると判断した。Table 1 に、因子分析結果に基づき、各項目とそれぞれの因子に対する因子負荷量、共通性、および信頼性係数を示した。抽出された2因子の記述統計量は Table 2 に示した。

Table 1 因子分析の結果

質問項目	因子負荷量		N=752 $h^2$
	I	II	
I・肯定的感情 ( $\alpha=.908$ )			
2・うれしい	.921	.047	.805
3・心地よい	.822	-.011	.685
1・幸福である	.813	-.063	.720
4・楽しい/面白い	.811	.006	.653
II・否定的感情 ( $\alpha=.810$ )			
7・イライラしている	.071	.853	.668
6・不愉快だ	-.053	.820	.722
8・怒り/敵意を感じる	.049	.757	.535
5・気持ちが沈んでいる/憂うつである	-.193	.526	.423
9・何となく心配だ/不安だ	-.010	.378	.147
(因子間相関: $r=-.536$ )	固有値	2.892	2.399

Table 2 各下位尺度の記述統計量

	N	(肯定的感情)		(否定的感情)	
		M	SD	M	SD
高校生	232	20.50	4.98	17.30	6.66
大学生	520	18.98	5.13	18.01	6.23
合計	728	19.45	5.13	17.79	6.37

第一因子は「うれしい」、「幸福である」、「楽しい/面白い」、「心地よい」の4項目で構成される「肯定的感情反応」を表す項目で構成されている。第二因子は「不愉快だ」、「不愉快だ」、「イライラしている」、「怒り/敵意を感じる」、「気持ちが沈んでいる/憂うつで

ある]、「何となく心配だ／不安だ」の5項目で構成されており、「否定的感情反応」を表している。因子間相関は、 $r = -.53$ であり、中程度の相関を持つことが示された。したがって、2つの因子は互いに関連している因子であると考えることが出来る。

また、交差妥当性を検討する目的で、高校生、大学生それぞれについて、因子分析（最尤法、プロマックス回転法解）を行なったところ、2つの集団において、各因子に所属する項目は全て同一であり、高校生においても、大学生においても、第一因子、第二因子ともに、因子を構成する全項目が、Thomas & Diener (1990) の構成した下位尺度と全く同じ結果となった (Table 3)。したがって、本調査票の交差妥当性が示されたものと考えられる。

Table 3 高校生・大学生別の因子分析結果

質問項目	高校生 (N=232)			大学生 (N=520)		
	因子負荷量			因子負荷量		
	I	II	$h^2$	I	II	$h^2$
I・肯定的感情	$(\alpha = .885)$			$(\alpha = .917)$		
1・幸福である	.738	-.108	.625	.851	-.036	.761
2・うれしい	.910	.103	.758	.913	.017	.816
3・心地よい	.886	.066	.739	.790	-.050	.672
4・楽しい／面白い	.739	-.017	.558	.840	.011	.696
II・否定的感情	$(\alpha = .815)$			$(\alpha = .815)$		
5・気持ちが沈んでいる／憂うつである	-.124	.579	.412	-.223	.497	.424
6・不愉快だ	-.069	.835	.752	-.053	.812	.712
7・イライラしている	-.010	.783	.621	.097	.884	.693
8・怒り／敵意を感じる	.034	.776	.580	.018	.734	.524
9・何となく心配だ／不安だ	.171	.481	.189	-.103	.312	.144
固有値	2.755	2.506		2.962	2.329	

注) 因子間相関は、高校生： $r = -.434$ ，大学生： $r = -.573$

信頼性については、 $\alpha$  係数による内的整合性の検討を行なった。その結果、肯定的感情については  $\alpha = .91$  (高校生 .89, 大学生, .92), 否定的感情については  $\alpha = .81$  (高校生 .82, 大学生 .82) であり、それぞれ十分な信頼性を備えていることが明らかとなった。

以上より、本調査票の信頼性・妥当性がともに高いことが示されたと考えられる。小川・門地・菊谷・鈴木 (2000) の一般感情尺度と同様に、本尺度は肯定的感情と否定的感情を相互に独立したものとして扱っている Watson & Clark (1997) の立場に依拠している。こうした肯定的感情と否定的感情の独立性についての議論は、実際に感情を生起させて実験的に検討する必要性が示唆されている (小川・門地・菊谷・鈴木, 2000)。今後は、種々の実験場面等で本調査票を使用し、ストレス反応の指標としての応答性の鋭敏さ、客観性

をさらに検討する必要がある。この意味でも 9 項目と極めて小項目の本調査票は実験での利便性を鑑みれば、有用なものであると考えられる。

#### 引用文献

- Cohen, S., Kessler, R. C., & Gordon, L. U. (Eds.) 1995 *Measuring Stress*, London, Oxford University Press (小杉正太郎 監訳 1999 ストレス測定法. 川島書店, 東京)
- Diener, E., Larsen, R. J., Levine, S., & Emmons, R. A. 1985 Frequency and intensity: Dimensions underlying positive and negative affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 1253-1265.
- Lazarus, R. S. 1999 *Stress and Emotion*, New York: Springer.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, Appraisal and Coping*. New York: Springer (本明 寛・春木 豊・織田正美 訳 1991 ストレスの心理学. 実務教育出版, 東京)
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 2000 一般感情尺度の作成. *心理学研究*, **71**, 241-246.
- 島津明人・小杉正太郎 1998 職場不適応発生過程の検討. *心理学研究*, **69**, 198-205.
- Stone, A. A., 1995 Measurement of affective response, In "*Measuring Stress*", London, Oxford University Press (小杉正太郎 監訳 1999 ストレス測定法. 川島書店, 東京)
- Thomas, D., & Diener, E. 1990 Memory accuracy in the recall of emotions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 291-297.
- Watson, D., & Clark, L. 1997 Measurement of mood: Recurrent and emergent issues. *Journal of Personality Assessment*, **68**, 267-296.
- Watson, D., Clark, L., & Tellegen, A. 1988 Development and validation of brief measure of positive and negative affect: The PANAS Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.